

## 橋本病の歴史

—その始まりと冠名病名「橋本病」の定着過程—

佐藤 裕

誠心会井上病院

福岡医科大学第一期生の橋本策（はしもと はかる）は、1907年に卒業と同時に三宅外科に入局し、三宅速教授より保存していた摘出甲状腺の病理組織学的検索を命じられた。病理学の中山平次郎教授と組織学の桜井恒二郎教授の指導のもと、両側の涙腺と唾液腺が無痛性かつ瀰漫性に腫大する Mikulicz 病に極めて類似した組織学的所見を呈する特異な甲状腺腫を見出し、1912年ドイツの Langenbeck's Archiv für Klinische Chirurgie 誌に「Zur Kenntnis der lymphomatösen Veränderung der Schilddrüse (Struma lymphomatosa)」として報告した（発症機転として何らかの慢性炎症機転を想定し、「リンパ腫性甲状腺腫」と命名）。これが後に「橋本病」と呼ばれるようになる「リンパ腫性甲状腺腫」の始まりである。その後、三宅速のあとを継いだ策の同級生である赤岩八郎教授門下の葛原輝が1931年に、「所謂琳巴腫性甲状腺腫 (Struma lymphomatosa) に就て」と題して統報第一号を発表しているが、日本ではあまり注目されなかったようである。

ところが、同じ1931年にアメリカ・クリーブランドの Allen Graham らが、“Arch Surg” 誌に「Atrophy and fibrosis associated with lymphoid tissue in the thyroid. Struma lymphomatosa (Hashimoto)」を発表したのである。Graham らは、著明なリンパ球浸潤を伴う甲状腺腫8例について臨床病理学的検討を加えた結果、橋本の「リンパ腫性甲状腺腫」は、従来からその異同が論議されてきた「Riedel's thyroiditis」とは明確に区別されうるとしたのである。「リンパ腫性甲状腺腫」の報告者を「橋本策」と明記したこの論文が契機となって、「リンパ腫性甲状腺腫」が独立した疾患として認められるようになるとともに、欧米の医学書に「橋本病 (Hashimoto disease)」として記載されるようになり、「橋本病 (Hashimoto disease)」と呼ばれて世界的に広がり定着していった。

1957年には、橋本策の同門の後輩にあたる秋田八年がアメリカ留学中にめぐり合った「橋本病」を逆輸入するとともに、埋もれていた橋本策関連資料の掘り起こしをすすめて、「臨床の日本」誌に「橋本氏病—その提唱者の面影と概要」を発表した。これを契機に橋本策の地元伊賀上野において顕彰事業が始まり、1975年には阿山医師会が中心となって橋本策の功績を讃える顕彰文集である「徳徳」が刊行されるに至った。

時代は前後するが、1956年にロンドンの Middlesex 病院の Doniach らが、“Lancet” 誌に「Auto-antibodies in Hashimoto's disease (Lymphadenoid goiter)」を発表している。Doniach らは、橋本病患者血清中のγグロブリン値が有意に高く、甲状腺を切除するとその値が低下すること、さらに患者血清とヒトの正常甲状腺組織抽出物とが交叉反応することに着目し、橋本病患者の血清から「抗甲状腺自己抗体 (anti-thyroglobulin antibody)」を抽出分離したのである。これにより橋本病の発症に自己免疫が関与していることが判明し、それ以後、甲状腺の「橋本病」は代表的な自己免疫疾患となった。後年、秋田八年は「橋本病」が自己免疫疾患であることを明らかにした Doniach 女史を表敬訪問したが、この際に提供した橋本策の肖像写真が1962年の“Lancet” 誌に掲載された。まさに、「リンパ腫性甲状腺腫」という不朽の業績をなした橋本策の“顔(面影)”が、世界中に知れ渡った記念すべき瞬間であった。